

蓬 左

HÔSA



張州雜志 卷20 「橋弁慶車」

蓬左文庫・徳川美術館

開館七十五周年の歩み

昭和十年（一九三五）十一月一〇日、尾張徳川家大曾根別邸内に徳川美術館が開館し、次いで三十日には、東京目白の尾張徳川家邸内に建設された蓬左文庫の公開がはじまった。十一月二十六日付けの大阪毎日新聞は「尾張徳川家相伝の秘宝を開放した名古屋の徳川美術館は、開館とともにわが国美術界に一大センセーションを巻き起こし連日千五百名平均の入場者で賑わっている」と報じ、二十八日付けの名古屋新聞は、「徳川家の蔵書の分類その他準備万端が整ったので、来る三十日盛大な披露会を催した後、一般に公開縦覧せしむることとなった」として東京目白の蓬左文庫の開館を報じた。

この時から二十五年余をさかのぼる明治末から大正初年、旧大名家の道具類が書画骨董のせり市に並ぶのを目の当たりにしていた尾張徳川家十九代当主徳川義親は、伝来の調度や蔵書の散逸を防ぐため、財団法人の設立と美術館、文庫の建設を決意し、昭和六年の財団法人黎明会の設立をへて、両館の開館にいたったのである。

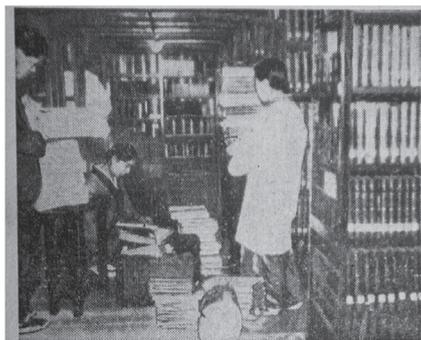
華やかに世間の耳目を集めて開館した両館ではあったが、戦争によって休館を余儀なくされ、戦後、資金難に陥った黎明会は、蓬左文庫の名古

屋市への売却を決定したのである。

名古屋市に移管された蓬左文庫は、美術館に隣接した大曾根別邸内に焼け残った什器庫を書庫に、木造の建物を閲覧室と事務室に利用し、昭和二十六年十一月一日、名古屋市蓬左文庫としての新たな一歩を踏みだした。昭和四十年には、木造の建物を取り壊して、そのあとに名古屋市東図書館が建設され、二階の一面に蓬左文庫の閲覧室と事務室が置かれた。昭和五十八年には、書庫として利用していた什器庫の西に新しい書庫を備えた新館を建設し、十月一日、念願の独立した建物での改築オープンを迎えたのである。

一方、空襲の被害を受けた美術館は、開館当初の建物で運営を再開したものの、財政難は二十一年余続いたという。やがて故徳川義宣前館長の大改革を経て、中部財界の支援を得た美術館は、昭和六十二年春、新たな常設展示室を備えた新館を増築し、改築オープンを果たした。これを機に、アメリカ、ヨーロッパなどで開催された徳川美術館の展覧会が成功を収め、凱旋展が国内でも開催され、美術館は、国の内外から注目を集める存在となった。外国人観光客の姿も目に付くようになり、徳川園界限は、にわかに脚光を集めはじめた。

これに着目した名古屋市は、徳川園一体を「全国に誇れる観光・文化拠点にしたい」と宣言し、



尾州家の蔵書を一般に公開

徳川侯邸の蓬左文庫、愈々完成

三十日盛大な披露會

【東京電】東京豊島区目白の會館と後、既に公開縦覧せしめられた尾張徳川侯邸の蔵書が、建つむ事となり、文庫の名稱も「尾州家」から「尾張家」に変更され、自らの財力をもって「尾州家」の蔵書の分類その他準備万端が整ったので、来る三十日盛大な披露會を催すこととなつた。

整備計画を進め、平成十六年十一月一日、新装オープンしたのが、現在の徳川園、徳川美術館、蓬左文庫である。徳川園には、新たに日本庭園が整備され、新しくなった蓬左文庫は、徳川美術館と廊下で繋がり、両館の所蔵資料を合わせて展示する展示室が整備され、閲覧室は三倍の広さになった。この整備の最重要課題が、徳川美術館と蓬左文庫の連携であった。文庫の移管から半世紀、隣接してはいても、組織を異にする両館の関係は近所づきあいの域を脱することとはなかった。昭和十年に誕生した兄弟館は、古稀を目前に、はじめて手を携えて歩み出したのである。

連携から五年、両館は、今年、共に開館七十五周年を迎える。（桐原千文・蓬左文庫長）

昭和10年11月28日付
『新愛知』

展示室1・2 徳川美術館（徳川美術館では4月10日(土)より開催）

春季特別展

開府四〇〇年、徳川美術館・蓬左文庫開館七十五周年記念

王者の華 牡丹

豪華で美しい姿から「百花の王」とも呼ばれる牡丹は、中国をはじめ朝鮮・琉球、そして日本で古くから愛好されてきました。花を愛でるだけでなく、牡丹は富貴のシンボルとして、さまざまな美術工芸品の意匠にもちいられました。徳川美術館・蓬左文庫開館七十五周年・徳川園リニューアル五周年を記念して開催される春季特別展「王者の華 牡丹」では、牡丹を表現した名品が一堂に会します。

中国では唐代にはすでに牡丹の観賞が盛んに行われ、牡丹の花を愛でる文化の成熟にともない、美術工芸品にも牡丹・牡丹文様が表されてきました。牡丹の様々な種類を描き分け、花弁の一枚一枚まで繊細に描いた作品から「牡丹唐草」の文様まで、表現は多岐に渡っています。また、朝鮮・琉球でも、中国文化の影響をうけつつ、独自の美意識によって牡丹文が生み出されてきました。本展覧会では、中国の宋時代から清時代までの、絵画・やきもの・漆工・金工・染織品、朝鮮陶磁・琉球漆器にみられる牡丹の意匠を紹介します。

また日本でも、牡丹は中国への憧憬しやうけいと結びつき、吉祥を表す重要な花として、あるいは神仏を荘厳するモチーフとして、各時代を通じて数多くの名品が生み出されました。獅子、孔雀、猫などのモチーフと組み合わせられることにより、画題としても多様な展開をみせています。国宝「平家納経」をはじめとする平安時代の遺品から、江戸時代の絵画・やきものまで、さまざまな時代・ジャンルの作品を展示します。

徳川園では牡丹の花が満開になる季節、本展覧会では美術工芸品に花開いた沢山の牡丹をご堪能ください。

国宝二件、重要文化財十七件を含む、約百七十件を展示予定。会期中展示替えがあります。



重要文化財
白磁銹花牡丹唐草文瓶（定窯）
中国 北宋時代 11-12世紀
（大阪市立東洋陶磁美術館蔵）

牡丹の花が胴の中央に大きく表されています。牡丹は蔓性の植物ではありませんが、「牡丹唐草」の文様には、富貴が連綿と続くようにという願いが込められています。



重要文化財
牡丹図（部分）伝銭選筆
中国 元時代 14世紀（高桐院蔵）

大地から天に向かって伸びていくようなダイナミックな牡丹図。日本に伝えられた中国絵画の中でも屈指の名品です。



重要文化財
牡丹図襖（部分）狩野山楽筆
江戸時代 17世紀（大覚寺蔵）

狩野山楽（1559-1635）は京都を中心に活躍した「京狩野」の絵師。直線的な形態の岩に牡丹と鳥を整然と配した構図が特徴的です。金地に大きく豪華な牡丹が映える名品です。



名古屋東照宮祭礼図 森高雅筆 9巻の内 江戸時代 文政5年(1822) (徳川美術館蔵)

元和2年(1616)4月17日に徳川家康が歿した後に、諸大名によって家康をまつるための神社である東照宮が各地に作られました。名古屋東照宮は、元和5年(1619)に初代義直によって創立され、江戸時代を通じて4月16日と17日の両日にわたり大規模な祭礼が行われました。

森高雅は玉僊とも称し、名古屋の風俗を描くのに優れ、尾張徳川家10代^{なりとも}齊朝にも好まれました。



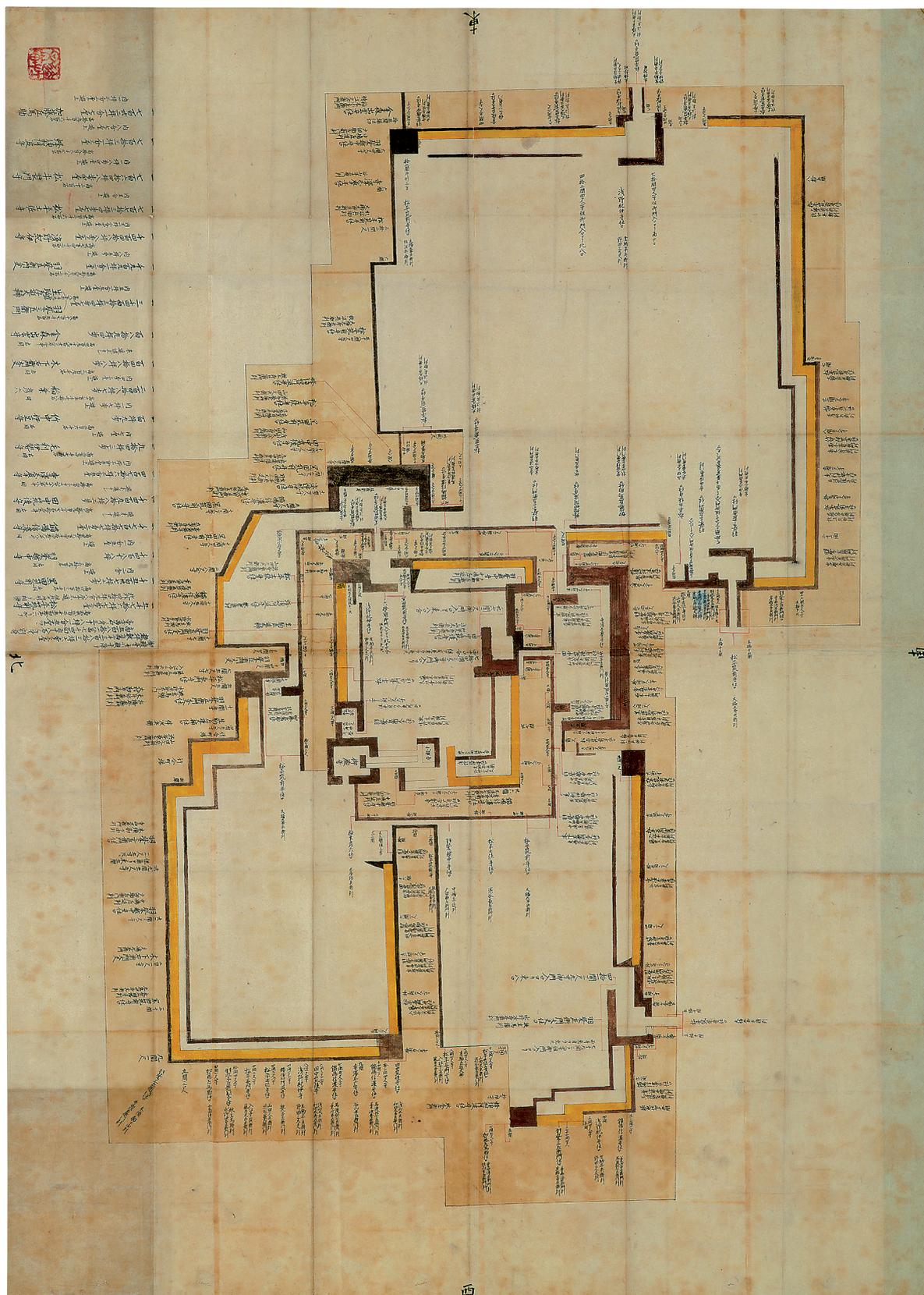
冠 附 梨子地芦雁蒔絵冠箱
 笏 附 螺鈿笏箱

名古屋東照宮御神宝の内 江戸時代 17世紀 (名古屋東照宮蔵)

名古屋東照宮の創建にさいして、社殿や神宝・調度類が新たに造立されました。家康に捧げた神宝として刀剣、甲冑、弓などの武具類も調えられました。また装束に附属する冠や笏も奉納され、いずれも善美を尽くした箱に納められています。



張州雑志 内藤東甫編 江戸時代中期 写 巻20 「猩々車」(8ページ参照)



なごやじょうふちんちやうぼわりのす
名古屋城普請丁場割之図

名古屋築城時に、普請手伝いを命じられた諸大名の持ち場図面。家康は豊臣^{おんこ}恩顧の有力大名を中心に諸大名の自己負担による手伝いを命じるなかで、天守台の石垣は、加藤清正が担当しています。天守の西側が、現状の堀ではなく御深井丸と地続きとなっていたり、北側の郭の形状が現状と異なっているなど、図面段階を含めて名古屋築城は幾度かの設計変更があったことがわかります。

開府四〇〇年、徳川美術館・蓬左文庫開館七十五周年記念

家康のまつり―名古屋東照宮祭礼―

名古屋は今年「開府四〇〇年」を迎えました。信長の時代、尾張の国の中心は清須でしたが慶長十五年(一六一〇)、家康の命により名古屋城と城下町が新たに造営されて、清須から武士や町人、寺院までが集団移住しました。「清須越」と呼ばれる大移動でした。その後、徳川幕府は体制を強固にし、城下町名古屋も江戸時代を通じて大きく発展しました。

名古屋の街が発展を始めた矢先、家康は元和二年(一六一六)四月十七日に七十五歳で病歿しました。家康の遺骸は久能山に葬られ、後に日光に移されました。初代藩主義直もまた、名古屋城内に守護神として名古屋東照社(後に「宮」と改称)を元和五年(一六一九)に創建しました。その祭礼は、「名古屋祭」と呼ばれて(江戸時代の)名古屋最大の祭礼となり、特色ある壮大な規模に発展しました。ことさらにからくり人形を備えた山車の行列は、華やかで全国に誇る最高技術を備えています。東海地方などからくり人形をそなえた山車の中核とな

り、周辺地域にも大きな影響を与えました。祭礼行列は、四千人あまり、最大時には七千人の人々が名古屋の街を練り歩きました。三基の御神輿の他に、各町内からは、巧妙かつ華麗なからくりを備えた次の山車が九輛加わりました。①橋弁慶車(七間町)、②林和靖車(伝馬町)、③雷電車(上島町)、④二福神車(上長者町)、⑤湯取神子車(桑名町)、⑥唐子遊車(宮町)、⑦小鍛冶車(京町)、⑧石橋車(中市場車)、⑨狸々車(本町)。これらの山車は、年次を追って追加され、祭礼行列での順序はおおむね固定しています。各々の山車には、能楽や和漢の故事にちなむからくり人形が、山車の上で舞い踊り、各町の財力や格式を誇る華やかな存在でした。山車の周囲にめぐらした幕も豪華な刺繍や織物が用いられました。

明治維新と戦災によって名古屋東照宮と祭礼の賑わいは、ほとんどが失われました。開府四百年の今年、今に残る品々を集めて往時の姿を振り返ります。



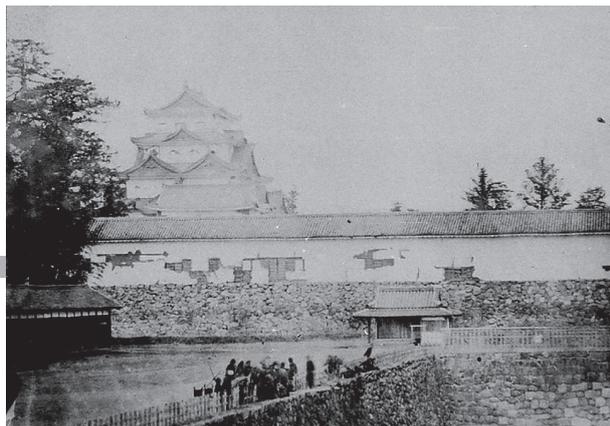
名古屋東照宮懸仏 3面 江戸時代 17世紀 (密蔵院蔵)

元和5年(1619)、徳川義直によって名古屋城三之丸に名古屋東照社および神宮寺として尊寿院権現坊が創建された。懸仏は御正体とも呼ばれ、鏡の姿をした御神体です。神仏習合にもとづき、家康をあらわす中央の薬師如来と両脇の仏の姿が立体的に表現されています。明治維新後、神仏分離により春日井の密蔵院へ譲られました。

展示室1・2 徳川美術館（徳川美術館では7月31日(土)より開催）

開府四〇〇年、徳川美術館・蓬左文庫開館七十五周年記念

大名古屋城展



古写真
名古屋城天守・本丸具足多聞櫓
徳川慶勝（尾張徳川家14代）撮影
（徳川林政史研究所蔵）

本丸南馬出から天守をのぞむ古写真。幕末の動乱期の尾張徳川家を支えた慶勝は、当時最新の伝来技術であった写真の研究に取り組み、数多くの撮影を行いました。慶勝が撮影した名古屋城の写真は、取り壊される建物の姿を映し出しているほか、殿様しか立ち入れなかった空間の写真もあり、歴史的に貴重な史料です。

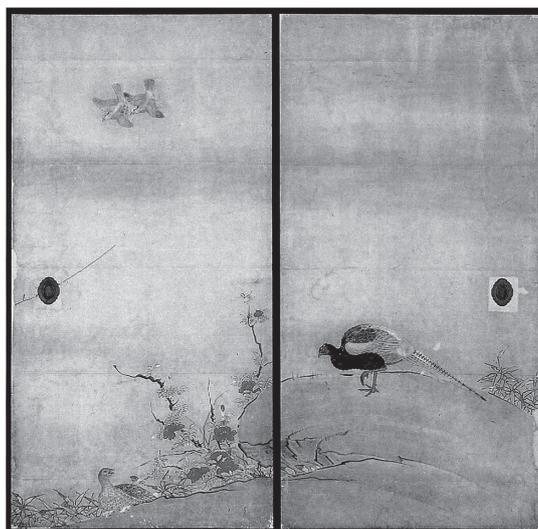
平成二十二年（二〇一〇）は名古屋築城が開始されてちょうど四百年目の節目にあたります。名古屋城は豊臣秀頼の大坂城を包囲する目的で、慶長十五年（一六一〇）閏二月に徳川家康により西国大名二十家を動員する天下普請で工事が開始されました。本丸・二之丸など主要部を総石垣造りとし、鉄壁な防御を施した天下の名城として、慶長十七年（一六二二）末頃に一応の完成をみたと考えられています。

金鯢をいただいた天守は、高さでは後に建造される江戸城と徳川家再建の大坂城天守を下回ったものの、床面積では両城を凌ぎ、両天守が焼失した後は、昭和二十一年に空襲で焼失するまで、名実ともに日本最大の天守としてその威容を誇っていました。

本丸は徳川將軍専用の宿所とされたことから、尾張徳川家歴代当主は二之丸御殿を居所としており、家臣は二之丸を「御城」と称していました。焼失を免れた本丸御殿障壁画や杉戸・天井画、徳川美術館に残る二之丸御殿障壁画の一部などから、絢爛豪華に彩られた御殿空間の姿を思い浮かべることができます。

この展覧会における蓬左文庫展示室では、関ヶ原合戦後の徳川家による尾張領有・名古屋

重要文化財
本丸御殿黒木書院障壁画
梅花雉子小禽図（部分）
（名古屋城管理事務所蔵）



本丸御殿北西部にあった黒木書院二之間と東入側境にあった障壁画。他の本丸御殿障壁画と異なり古様を示した作品で、黒木書院自体が旧清須城内にあった家康寝所を移築したという伝承を後押ししています。城下町ともども清須から名古屋へ移転した「清須越」を物語る数少ない作品の一つです。

築城の過程と、城と城下町の関わりを中心に展示を行います。なお、徳川美術館展示室では、障壁画をはじめとする御殿の遺構や、庭園空間における文芸、城内に保管された尾張徳川家伝来の名品の数々を紹介すると同時に、尾張徳川家十四代慶勝によって幕末に撮影された名古屋城の古写真より、往時の景観をしのびます。

東照宮祭礼の山車

表紙の山車は七間町(現中区丸の内三丁目・錦三丁目)の橋弁慶車で、牛若丸(源義経)と武蔵坊弁慶の二体のからくり人形が乗っています。京都の五条大橋での対決を題材にした能楽「橋弁慶」は、中世以来、多くの人々に親しまれてきました。七間町は、東照宮祭礼に山車が登場した元和五年(一六一九)から山車を出していますが、その翌年に橋弁慶車となりました。水引には猩々緋(深紅色の毛織物)が用いられていますが、元々は三葉葵紋付の水引を下賜されており、幕末に再び三葉葵を許されます。東照宮祭礼の九輛の山車は、昭和二十年(一九四五)の戦災で焼失してしまいましたが、橋弁慶車の人形頭は火災を逃れました。江戸時代には牛若丸の人形頭は神体のように小祠に祀られ、子どもの頭瘡(頭にできるおでこ)が治るといわれていました。

裏表紙は、明治四十三年(一九一〇)の開府三百年紀年祭に際して盛大におこなわれた東照宮祭礼の写真絵葉書です。四月十七日の朝、本町通を北から見た光景で、



名古屋東照宮祭典実況 明治43年(1910) 名古屋市博物館蔵

本町の猩々車が写っています。猩々車は、いわゆる名古屋型の山車の先駆で、万治元年(一六五八)に造られました。橋弁慶車と異なり、唐破風の屋根をもち、周囲を高欄が囲んでいます。その中では男女二体の猩々(想像上の怪獣で、体は朱紅色の長い毛におおわれ、酒を好むとされています)が酒を飲んでいきます。江戸時代の中期になると、橋弁慶車と猩々車が隔年で先車(山車の先頭)となりました。

蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫 〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地 TEL(052)935-2173 FAX(052)935-2174
ホームページ <http://housa.city.nagoya.jp/> / <蔵書検索もできます。>

交通案内

■公共交通機関をご利用の場合

●名古屋駅より

- 【市バス】名古屋駅バスターミナル(テルミナ2F)グリーンホーム7番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分
- 【名鉄バス】名鉄バスセンター(メルサ3F)4番のりば基幹バス「引山」方面行「徳川園新出来」下車徒歩3分
- 【JR】JR中央本線、「大曽根」下車南出口より徒歩10分
- 【地下鉄】東山線「藤が丘」方面行、「栄」で名城線「右回り」に乗り換え「大曽根」下車3番出口より徒歩15分 桜通線「野並」方面行、「車道」下車①番出口より徒歩15分

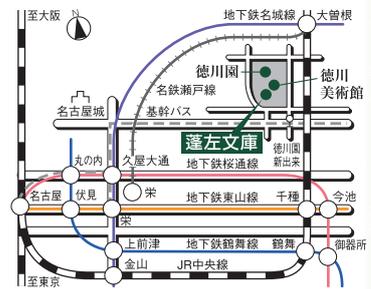
【なごや観光ルートバス「メーグル」】名古屋駅バスターミナル(テルミナ2F)発着で平日1時間に1本、土・日・休日は30分に1本運行

●栄より

- 【市バス】栄バスターミナル(オアシス21)3番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

■お車をご利用の場合

蓬左文庫専用駐車場はありません。徳川園駐車場(有料 30分 120円)をご利用下さい。



ご利用案内

■休館日/月曜日(祝日のときは直後の平日) 5月6日(木)臨時開館、8月16日(月)は展示室のみ臨時開館します。

12月中旬～1月3日 ※催事により変更することがあります。

■展示室/有料 一般:1200円 高大生:700円 小中生:500円(蓬左文庫・徳川美術館 共通観覧)

【開室時間】午前10時～午後5時(入室は午後4時30分まで)

■閲覧室/無料・館外貸し出しはいたしません。

【閉架図書】午前9時30分～午前12時 12時45分～午後5時 【開架図書】午前9時30分～午後5時

【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。電話・郵便による申込みも可。

「蓬左」第80号 ☆平成22年3月31日発行 ☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫 ☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷：菱源(株)
※古紙パルプを含む再生紙を使用しています。